『命を守るためにできること』

北海道
北海道教育大学附属函館中学校　二年
石毛（いしげ）　久瑠美（くるみ）

朝顔。それはただ道端に咲く一つの花かもしれない。しかし私は知っている。あの朝顔には交通事故防止のために努力する、たくさんの人の想いが込められていることを。

私が「けんちゃんの朝顔」を知ったきっかけは、新聞だった。平成二八年に足立区内で下校中の小学一年生がトラックにはねられ命を失ったという事故があり、その小学生の母親が「子供が自宅で育てていた朝顔の種を、被害者支援と交通安全のシンボルにしたい」と配布し、小中高生に交通安全と命の大切さを伝えているという記事だった。

私はその記事を読んだ時、グッと、胸を締め付けられるような感覚になった。命を失った小学生は普通に青信号を渡っただけ。何も悪くないのに。同じ命なのに。そう思ったからだ。そして、この事故直後、母親は「私が迎えに行っていれば防げたかもしれない」と自責の念に駆られていたそうだ。「どんなに努力してもけんちゃんは帰ってこない」それでも、交通事故防止のためにたくさんの学校で講演をして、朝顔の種を配り続けていることを知った。私が同じ境遇に遭った時、自分の経験を誰かに話すなんてできるだろうか。いや、できないだろう。でも、いつ誰が被害者になるかわからない世の中。私だって被害者になる可能性がある。だからこそ、普段から交通ルールを守って生活することは自分だけではなく誰かの命を守ることにもつながると実感した。

私は「けんちゃんの朝顔」への想いを知る中で特に印象に残った言葉がある。それは「交通安全は決して人ごとではありません。自分一人だけでは達成できないからです。誰も悲しい思いをしないように、みんなで交通安全を目指しませんか。」というけんちゃんの母親の言葉。交通事故は誰か一人の力ではなくならない。みんなが取り組んで初めて結果が出る。自分で理解はできていたけれど、誰かがルールを守ってくれていれば。自分は歩道を歩いているから大丈夫。そうやって、あまり深く考えたことがなかった。この言葉は、そんな曖昧だった自分に深く突き刺さった。だから、これからは「もしも」があると考えて横断歩道では今までより注意して右左を見たり、夜間に出歩く時は反射板を付け、車が自分を認識できているか確認してから渡るなどを心がけたい。こうやって、自分一人の改善でも、沢山重なって一人ひとりが交通ルールを守る世の中になっていけば失われる命は減るのではないか。

「けんちゃんの朝顔」を知っていくうちに、私の命への考え方は変わっていった。「ガザの戦闘による死者数は約三・五万人。」その「約」にはいくつの命が省略されているのだろうか。「三・五万人」の中に入っている人と、「約」で省略されている人の違いは何だろうか。疑問が湧いてきた。

命は換えがない、自分だけが持つもの。同じ命なのに、理不尽に奪われ、生ききれなかった人たちがたくさんいることを知った。誰もが安心して生きられる世の中を自分たちで作

っていく。そして、私もその一人として生きていく。